

【研修報告】

「33rd International Association for Human Caring Conference」に参加して

実藤 基子*

はじめに

本学より海外研修出張助成を受け、平成24年5月30日から6月2日に開催された“33rd International Association for Human Caring Conference”に参加し、研究発表をしたのでその報告をする。

本学会は、毎年ヒューマン・ケアリングに関するテーマを主題として開催され、世界各国から、看護教育者や臨床看護師らが参加している。本年は、「Caring Connections: Research, Practice, Education」というテーマのもと、米国、フィラデルフィアで開催された。

学会のスケジュールは次の通りである。

オープニングのKeynote Speakerは、Jean Watson博士であった。博士の登場とともに会場の照明が絞られ、お香が焚かれ、静寂で神秘的な空間が広がった。Jean Watson博士の儀式のような所作と語り、また、世界各国の風景、人々との関わりとつながりを伝えた数々の写真や絵画が紹介された。スピーチでは、「我々（人間）は無限の可能性を秘めている。それに気づかなければならない。今、目の前に見える事柄だけでなく、人々の心の中に湧き上がっている思い、あるいは、今後起こるだろう事柄、に敏感になって、自ら関わり合いをもつように働きかけなければならない。それによって、混沌とした闇の世界が開け、目の前に世界が（明るく）広がり、一つ一つの事象に意味があり、価値があることを知ることができるようになる。今、まさに看護（のもつ力）—ヒューマン・ケアリングは、社会や世界平和に強く密着し

貢献している。我々に託された使命を熟考し、人と世界をつなぐ役割を共に担っていきましょう。」という力強いメッセージが送られた。

学会発表の内容

本学会での発表は、6月1日の夕刻より、ポスターセッション&レセプションといった形で行われた。発表者は、自分のポスターの前に立ち、その場を訪れた人々へ内容説明をしたり、意見交換をしたりした。この時間は、バイキング形式の食事や飲み物が準備されており、とても和やかな雰囲気の中、各ポスターの前では、熱心な議論や笑顔の記念撮影が繰り返されていた。

今回私は、「乳がん患者が有益であると認知したソーシャル・サポート—看護職者に焦点を当てて—（Social support that patients with breast



写真1：ワトソン博士を囲んで

表1 学会スケジュール

5/30	Board Meeting; Registration/Reception 4PM to 7PM
5/31	Registration/Keynote; Conference
6/1	Registration/Keynote; Conference; Student and Traditional Poster Session 6 PM to 8 PM
6/2	Registration/Keynote; Conference

* 日本赤十字広島看護大学

cancer recognize as beneficial - Focusing on role of nurse -)」について発表したので、その一部を次に紹介する。乳がん患者は診断されてから治療選択や治療過程において、他者から様々な支援を受ける機会をもつ。近年では、各地で患者会が発足しており、患者自らが自分たちのQOLを高めるべく様々な活動を展開している。患者会で同病者から受ける影響として、「励まされた」、「自分だけではないと思えた」など、プラス面での報告が数多くみられている。医療現場では、乳腺外科や乳腺専門外来等が開設されており、看護職が担う役割・責任の大きさが理解できる。現在、乳がん患者への看護に関する文献は数多くあるが、看護の受け手である患者自身が看護職者からのサポートをどのように認識しているかについて検討した報告は少ない。私自身、臨床現場で長年乳がん患者と接し、様々な援助を行ってきた経験がある。しかし、援助の受け手である患者が認知した<看護職者からのサポート>とはどのようなものであるか、という観点からの理解が不足していたのではなかったかという反省がある。看護職者がそれを理解することによって、より有益なサポートができるのではないかと考え、研究として取り組んだ。対象者は、初発乳がん、乳房温存術か切除術を施行され、研究への協力の同意が得られた者へインタビューによる個人面接を行って得られたデータを分析した。

看護職者に焦点を当てて分析した結果、看護職者からの有益なサポートとは、情緒的サポートでは、日々の看護臨床におけるケアリング（気遣い、優しさや温かい態度、傾聴的関り）の実践、道具的サポートでは、自らが熟考し主体的に看護活動（症状や時期に応じた援助）をすること、情動的サポートでは、対象者の全体像をよく知る立場として、情報提供や他職者との調整を図ることであった。看護職者の情緒的サポートに注目してみると、家族・友人、同病者では補えないサポートとして、『心配事を聴いてくれる』、『家族には話せない悩みの相談』があった。患者は家族・友人が親しい間柄であるがゆえに、余計な心配をかけたくないという思いをもっていた。

また、セクシュアリティに関する問題等は、なかなか身近な人へ本心を打ち明けられない現状であった。他に、『ちょっとした気遣い』、『温かな態度』、『何気ない言葉がけ』が有益であったと認識されていたが、看護職者は常に対象者の近くにいることから、対象者へ及ぼす情緒的な影響が大きい。家族・友人は、対象者と同様に傷つき、悲しんでおり、相手を思う優しさや気遣いを言葉や態度を通して対象者へ上手く伝えられないことがある。

本研究によって、看護独自のヒューマン・ケアリングを基盤としたソーシャル・サポートを明らかにすることができた。

おわりに

私は本学会への参加が2度目であった。前回の学会参加と同様、本学会は、参加者が自己の研究を発表するだけでなく、プレゼンテーションをする側も受ける側もお互いの研究に興味・関心を寄せて語り、研究報告のなかで展開されている看護実践を認め合い、互いに讃えながら進められた。そして、前回のように、国による教育制度や実践方法に相違はあっても、ヒューマン・ケアリングは看護職者の本質であることを再認識することができた。

謝 辞

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった日本赤十字広島看護大学に感謝いたします。

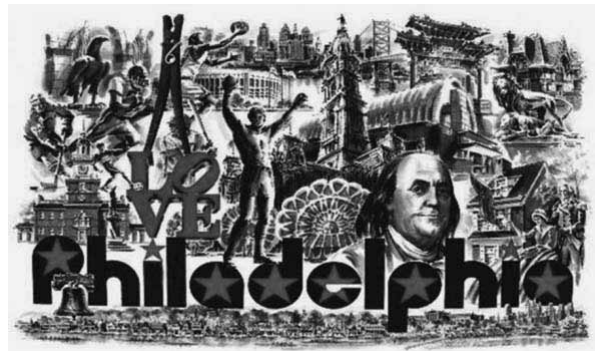


写真2：本学会のシンボルマーク